

No. A2

○ 共通第 1 次学力試験の地域別平均点における差異の年度間安定性 清水留三郎 1982年 1 月

共通第 1 次学力試験では、例えば大地震のような、不測の事態が万一発生し、本試験の実施が不可能になった地域においては、再試験を行うことになっている。この場合、本試験と再試験の試験問題の間に難易度に差がないことが望まれる。ところが、受験者群は異なるから、試験問題に難易差がなくとも、平均点には差があり得る。従って、単純に平均点を揃えることは合理的でない。この問題の解決に役立てるために、どの都道府県に所在する試験場で受験したかによって受験者を分け、最初の 3 回の共通第 1 次学力試験の各科目について、各受験者群の平均点を求め、3 次元空間に配置したところ、どの科目についても、それらは 1 つの直線にはほぼ沿って並び、直線に垂直な成分の平方和は、平行な成分の平方和

と比較して極めて小さいことが判明した。この意味で地域別受験者群の平均点は年度間で安定である。しかも、直線に平行な成分の差は、各受験者群内における得点の変動に対して、有意であることが示された。これは、再試験の該当地域の受験者群の学力が、その地域の過去の受験者群の学力から、ある程度推定できることを示唆している。

大学入試センターでは、大学 1 年生約 250 名に委嘱して、同一人に本試験と追試験の双方とも受験させることを行っている。その成績から 2 つの試験の問題間における難易差の情報が得られる。地域別受験者群の学力と試験問題間における難易差の 2 つの推定値を比較すれば、推定の精度を確かめることができよう。